

ツンデレ表現の待遇性

—— 接続助詞カラによる「言いさし」の表現を中心に ——

西 田 隆 政

The Speech Levels of the TSUNDERE Expression

—— Mainly on Expression of the “IISASHI” by Conjunctive Particle Kara ——

NISHIDA Takamasa

Abstract : This Paper examines a Feature Characteristic in the use of the TSUNDERE Expression from the side of the Speech Levels. As a Result, about the TSUNDRE Expression of “IISASHI” by Conjunctive Particle KARA, it has turned out that there is a limit in the use on the Speech Levels. The Expression requests a Hearer to sympathize with a Speaker’s real intention by saying reverses one. Therefore, it is thought that there is a limitation in the use when a Superior uses it for an Inferior.

要旨 : 本稿は、ツンデレ表現を待遇性の側面から使用上の特徴を検討したものである。その結果として、接続助詞カラによる「言いさし」のツンデレ表現については、他のツンデレ表現とはことなり、対偶面での使用上の制約があることがあきらかになった。この表現は、相手に対して、自分の本心ではないことをいうことで、逆に自分の本心を察することを要請する。それゆえ、上位者が下位者に対して使用するのには、使用上の制約があるとかんがえられるのである。

キーワード : キャラクター・発話頭のつかえ・上下関係・対等の関係・お嬢様ことば

稿では、(2) のように定義する。

1 ツンデレ表現とは

ツンデレというキャラクターが、現在(2009年)のマンガやアニメーションやゲームやライトノベル等の作品において、重要な位置をしめている。このツンデレとは、一般的にはつぎのように説明される。

- (1) いつもはツンツンしているのに、2人になるとデレデレしちゃう。または、付き合う前はツンツンだが、仲が深まるとデレデレになってしまう状態。(萌え用語選定委員会2005:87)

そして、これに該当するキャラクターの使用するのがツンデレ表現である。ツンデレ表現については、本

- (2) ツンデレとされる、強気で不器用なキャラクターが、特定の相手に対して、自分の心が動揺したときに、それをごまかすために使用する表現。

このツンデレ表現の使用状況については、西田(2008)で概観した。(3)(4)が典型例とかんがえられる。

- (3) し、心配なんてしてないんだからね！(釘宮2007:「し」の読み札)¹⁾
 (4) アーニャ「さっきのあれは全然違うんだからねっ!? 事実無根よ！」(赤松健『魔法先生ネギ

ま!』⑩講談社2007年10月:47)

これら例では、発話頭の「つかえ」、接続助詞カラによる「言いさし」、終助詞ネ・ヨ、発話末への促音要素の付加などが使用される²⁾。ツンデレとされるキャラクターは、この表現を使用することで、相手に対して、心の動揺をごまかして、自分の本心(恋心等)をかくそうとする³⁾。これらをふまえて、本稿で検討する、典型的なツンデレ表現を、(5)のように定義する。

- (5) 接続助詞カラによる「言いさし」を使用することで、ツンデレキャラクターが心の動揺したときに、特定の相手に自分の本心とはことなつたことばを発して、自分の本心をかくそうとする表現。

しかし、ツンデレキャラクターとされる登場人物全員が、典型的なツンデレ表現を使用するわけではない。代表例としては、『涼宮ハルヒの憂鬱』⁴⁾の主人公ハルヒ、『ローゼンメイデン』⁵⁾のドールの1人翠星石、『灼眼のシャナ』⁶⁾の主人公シャナ、などがあげられる。

本稿では、これらの点をふまえて、ツンデレと認識されるキャラクターでも、なぜ典型的なツンデレ表現を使用しないキャラクターがいるのかという点について、使用する側と使用される側の待遇的な差異に注目して、検討していくことにしたい。

2 典型的なツンデレ表現を使用する キャラクター

まず、典型的なツンデレ表現を使用するキャラクターからみていく。西田(2008)では、『美鳥の日々』⁷⁾の綾瀬貴子と『らき☆すた』⁸⁾①～⑥の柊かがみで検討した。本稿では、『暴れん坊少納言』⁹⁾の登場人物、清少納言で検討する。

この作品は、「枕草子」の作者として名だかい清少納言を、ツンデレキャラクターと設定して、1000年前の平安朝の貴族社会をギャグタッチでえがくものである。コミックス第1巻初版の宣伝の帯には、「平安中期の天才エッセイスト清少納言。この少女、いとツンデレなり」とあり、ツンデレキャラクターを売り物にした作品であることがわかる。彼女は、つり目のきりっとした顔だちで、強気なツンデレキャラクターらしさをもっている。

主人公清少納言と橘則光の2人は、友人以上恋人未満という関係でえがかれ、日常的には口ゲンカをくりかえしてばかりいる。これは、ツンツンの表現である。

- (6) 則光「お前のようなイヤな女見た事ないわ!!」
清少納言「うっさいわよ このバカ天然!!
へその緒切れてから出直しなさいよ!!」
薫「イイ感じかと思ったんだけど…」
「ムコ取りは当分先かなあ」
(暴れん坊少納言①:64)

(6)では、清少納言の侍女、薫の心配をよそに、毎度ケンカをくりかえす2人の様子がえがかれる。そのような日々のなかで、2人の親密さがすこし進展したときに、ツンデレ表現が使用される。

- (7) 則光「これはどういう魂胆だ?」
「まさか呪いではあるまいが…」
清少納言「し…失礼ね!! 良く働いてくれた分よ!!」「勘違いしないでよ…今回だけ!!
特別なんだからね!?!」
(暴れん坊少納言③:27)

- (8) 清少納言「の…則光が悪いんだからねっ!!」
「飲めもしないのに酒盛りなんか行くから!!」
(暴れん坊少納言②:129)

(7)では、徹夜をしてまで自分のために雪のウサギがとけないように配慮してくれた則光に対して、膝枕をしてのセリフである。なにかお礼をしなればとおもいつつも、すなおに自分の気持ちを表現できないという例である。本心では、今回だけでなくいつも恋人でいたいというのがある。(8)は、2人で鞍馬に行く途中で道にまよってしまい、腹だちまぎれに、則光にいうセリフである。体調がわるいのに、則光が自分のために真剣に手をかしてくれているのはわかっており、本心では自分がわるいとはおもうものの、ついそれと逆のことばを発してしまい、八つあたりをしている。

しかし、この(8)の直後には、則光がねいってしまってから独言ではあるものの、デレデレの表現をしている。

- (9) 清少納言「アンタの気持ちぐらい」
「こっちはもうとくにわかってんのよ…バカ!!」
(暴れん坊少納言②:132)

(9) では、彼の好意を十分にわかっていながらも、すなおになれず、彼がねてしまってから、やっと本心がいえるようになる。ここでの清少納言は、強気で不器用なツンデレキャラクターである。彼女は、則光への恋心はもちつつも、それをうまく表現できないキャラクターという性格づけである。

この作品中の清少納言から橘則光へのツンデレ表現をかんがえるうえで重要なのは、たんに恋愛関係にあるというだけでなく、2人がともに受領階級という当時の中流貴族であったということである。おなじ階層に属するということから、両者には待遇面での上限関係がなく、対等の関係という設定で、マンガではえがかれている。

その点からすると、西田(2008)で検討した、綾瀬貴子や柊かがみにも、通じるものがある。彼女たちの相手は、おなじ学校の同級生であり、クラスメイトや友人として、対等の関係という設定である。

典型的なツンデレ表現を使用するキャラクターは、強気で不器用という、性格的な属性をもつだけでなく、ツンデレ表現をおこなう相手とは対等の関係にあるという面が重要なポイントとなりそうである。そこで、次章では、このような表現を使用しないキャラクターの例をみていくことにしたい。

3 典型的なツンデレ表現を使用しないキャラクター

典型的なツンデレ表現を使用しないキャラクターの例として、1章でもふれた、『ローゼンメイデン』の翠星石を検討する。翠星石は、この作品に登場するローゼンメイデンと称される7人のドールの1人であり、蒼星石との双子という設定である。おさない顔だちながらも、本気のときにはきびしい表情をみせる、強気で毒舌のツンデレキャラクターである。彼女は登場当初から、主人公の男の子桜田ジュンをみくだしたような発言をする。ツンツンの表現である。

- (10) 翠星石「下等動物にもわかるよう簡単な言葉で言ってやったです その寝ぐらに潜って出てくるなよ……です」¹⁰⁾
翠星石「わかったか ちび ですよ」
ジュン「んなア——!?!」
(『ローゼンメイデン』②：162)

(10) では、「下等動物」「言ってやった」「出てくる

なよ」「寝ぐら」「ちび」など、ジュンを下僕のようにあつかい、目上から目下へを意識した表現がつづく。

それが、仲間のドール真紅が危機におちいったのをたすけようと、ドールとしての力をえるために、ジュンと契約すると、そのセリフに変化があらわれる。

(11) がツンデレの表現で、(12) がデレデレをしめす表現である。

- (11) ジュン「僕はお前とも契約したんだろ？」
翠星石「…………… そんなの…別にっ」
「あの時はピンチでそうするしか…事故みたいなものでありますです ちび人間 なんかマスターでも何でもありませんです」
(『ローゼンメイデン』③：156～157)
(12) 翠星石「翠星石はジュンをマスターに選んだです!!」「だから……守るです！」
(『ローゼンメイデン』④：32)

翠星石は、ジュンの力をみとめて契約したものの、すなおにそれを口にはださない。(11) では顔をそむけて、ほほをそめながらも、自分の行為はやむをえなかったものだとする説明をして、強気なセリフをいう。しかし、ここで翠星石がジュンをみなおしていることは、あきらかである。また、(12) では、敵方となった双子の妹、蒼星石の攻撃からジュンをまもろうとして、いったセリフで、ここでは、本心をそのまま表現して、ジュンをまもることを宣言している。

(11) の部分で注目されるのは、「別にっ」と「ちび人間なんか」というセリフである。これらは、(3) (4) (7) (8) にあげたような、典型的なツンデレ表現とはことなるものの、ツンデレの気持ちをあらわす表現としては、機能しているとかんがえられる。

- (13) 別に子猫なんて…す、好きじゃないんだから！(以下略)
(釘宮2008：子恋巻菜の札)
(14) 言い訳してんじゃないわよっ。(以下略)
(釘宮2008：飯田潤の札)
(15) 利用するに値しないわね アンタなんか…
(釘宮2007：りの読み札)

(13) から (15) は、釘宮理恵¹¹⁾ がツンデレキャラクターのセリフをふきこんだカルタシリーズでの文言である。副詞「別に」や発話末の促音要素の付加、

「～なんか」などは、これらのなかでもツンデレセリフの有力な表現上の要素として、使用されている。これらは、いずれも、相手に対して心の動揺をしめしつつも、逆に強気な態度をくずそうとしないものである。

しかし、その一方で、これらのツンデレの表現は、本心をかくして、逆のことをいってしまうというほどのものではない。ただし、(13)の例では、発話頭のつかえで、心の動揺がことばにあらわれて、「別に」では自分はそれほど気になっていないことをいうだけでなく、後半の「好きじゃないんだから」では、本音は子猫がすきなのに、それをごまかして、逆の内容のことを、おもわず口にしてしまっている。要するに、「～から」の「言いさし」の部分において、心の動揺のあまり、本心と逆のことをその場のいきおいでいってしまうのである。

そうかんがえると、2章の清少納言では、(7)(8)の例のように、「～から」の「言いさし」の部分で本心と逆のことをおもわず口にする部分があるのに対して、翠星石では、(11)のように、強気な態度をくずさず、心の動揺をしめず部分はあるものの、それ以外はいくまでも自分の行為が正当なことであったとの説明をしようとしている。

おなじツンデレキャラクターではあるものの、清少納言と翠星石では、あきらかにツンデレ表現の使用法がことなっている。心の動揺をしめたあとに、どのような表現がおこなわれるのか、という点が両者の差異として注意される。

これは、さきの清少納言と則光との関係がほぼ対等のものであったのに対して、翠星石とジュンとの関係を、主人と下僕という上下関係として、翠星石が意識していることが関連しているともかんがえられる。その点を、より詳細にみていくために、4章では、同一作品内で、典型的ツンデレ表現を使用するキャラクターと使用しないキャラクターの登場する作品を検討することにしたい。

4 2人のツンデレキャラクター お嬢様と同級生

この章でとりあげる、マンガ『ハヤテのごとく!』は、現在『少年サンデー』誌（小学館）連載中の、人気ラブコメ作品である。高校1年生の主人公の綾崎ハヤテ（16歳）は、1億5千万円の借金を親におしつけられて、路頭にまよっているところを、大金持ちのお嬢様の三千院ナギにひろわれて、そのお屋敷で執事と

して仕事をはじめるというストーリーである。

作品進行のなかで、ハヤテはおおくの少女たちと、擬似恋愛のような関係となる。そのなかでも、ハヤテを執事にやとった、お嬢様のナギ、それに、ハヤテたちの通学する白鳳学院高等部の生徒会長、桂ヒナギクの2人が、ツンデレキャラクターという面で、注目される。

三千院ナギは、弱冠13歳にして大金持ちの三千院家の跡取りで、現在広大な屋敷に、執事長のクラウド（58歳）、ハウスメイドのマリア（17歳）、ペットであるホワイトタイガーのタマ、それに執事の綾崎ハヤテと、生活している。

身長138cmと小柄で、金髪のツインテール、つり目と、ツンデレキャラクターらしい風貌である。飛び級で高校1年生に進学している秀才で、いかにもお嬢様らしい、非常にわがままで強気でまげずぎらいな性格である。ハヤテに対しては、執事としてやとった当初から恋心をいだいているが、ハヤテの鈍感さとナギのすなおになれない性格で、2人の関係はつねに平行線のままである。

桂ヒナギクは15歳の高校1年生、白鳳学院高等部の生徒会長をつとめるだけに、学年トップの秀才で、なおかつ剣道部の部員でもあり、文武両道にたけている。性格は、非常に強気でまげずぎらいである。つり目できりっとした顔だちで、委員長タイプのツンデレキャラクターを感じさせる風貌である。綾崎ハヤテとは、白鳳学院でしりあってから、友人のナギの執事として、興味をいだいていたが、次第に自分のおもいが恋心であると気づくようになる¹²⁾。

そして、この2人は、作品中にも、性格がにているという記述がある。

(16) ハヤテ「でもヒナギクさんと話しているとなんか…」
「お嬢様と話をしているような気がしてきて…」

（『ハヤテのごとく!』⑤：74）

(17) ハヤテ（心内）「は～ ヒナギクさんやっばりお嬢様と同じで… すごい負けずぎらいだなあ～」

（『ハヤテのごとく!』⑤：78）

ヒナギクと夜の校舎で一緒にオバケ退治をしているとき、ハヤテはヒナギクの態度から彼女が自分の主人であるナギと非常によくにているを感じとっている。また、公式のガイドブックである畑（2007）でも、

「あまり触れていませんがナギにとってヒナギクは憧れの存在で、こうありたいという理想そのもの」(：94)とする作者の解説があり、両者には通じる部分のある設定であることがあかされている。2人の名前が「ナギ」「ヒナギク」と音がかさなるところも、それを暗示しているであろう。

そのような2人ではあるが、作品のなかではツンデレキャラクターとしての言語表現はことなっている。ここでは、彼女たちとハヤテとがであった直後の、作品内でも初期の例を中心に検討する。まず、彼女たちのツンツンの表現からみていく。

- (18) ハヤテ「でもやっぱり緊張しちゃうよ。」
 「マリアさんみたいなキレーな人と一緒だと…」
 ナギ「……」
 ナギ「…どういう意味だ、それは。」
 ハヤテ「え？ どうって…そりゃ…」
 ナギ「言っておくがマリアに手をだしたら…」
 「殺す程度ではすまさんぞ」
 ハヤテ「……………」(心内)「何を怒っているのかしら…？」
 (『ハヤテのごとく!』①：83～84)
- (19) ヒナギク「ハヤテ君になら…」「何されても……………」
 ハヤテ「え…あ…」「ヒ…」「ヒナギク……さん？」
 ヒナギク「——なんて冗談を言うとなりの子は真に受けるのかしら？」
 ハヤテ(ピキッ)「!! ぐっ!!」
 ヒナギク「ご忠告ありがとうございます。今後、注意するわ。」(勝った♡)「ハヤテ君みたいな男の子には。」
 ハヤテ「……………」(ズーン)
 ハヤテ(心内)「ヒナギクさんの事、お嬢さまと同じくらい負けず嫌いだって思ったけど違う…」
 ハヤテ(心内)「ヒナギクさんは…」
 ハヤテ(心内)「お嬢さま以上に……負けずぎらいだ……………」
 (『ハヤテのごとく!』⑤：76～77)

(18) は、ハヤテがナギを誘拐犯からたすけて瀕死の重傷をおったのを、屋敷内で治療しているところである。ハヤテがハウスメイドのマリアが美人であること

を意識するのに、ナギは本気でおこっている。(19) は、ハヤテとヒナギクが夜の校舎でオバケ退治をしている際に、ハヤテにたすけられ、ヒナギクがプライドを刺激されて、逆襲にでたところである。冗談めかして、ハヤテをこまらせることで、一本とった気分である。

ナギとヒナギクは、ともに強気でまげずぎらいのキャラクターであり、このように、腹をたてるとすぐにきついことばで反撃してくる。しかし、それが弱点を指摘されると、一転してツンデレの表現を使用する。

- (20) ハヤテ「お嬢さま、夜一人だと怖くて眠れなかったんでしたね。」
 ナギ (!!)
 ナギ「だ…!! 誰がそんなことを!!」
 ハヤテ「へ？ 昨日の夜マリアさんが…」
 ナギ「や!! マ!! マリアの奴!! や!! ち!! ちがうぞ!!」
 ナギ「べ!! 別に一人で眠れない事もないのだぞ!!」
 ナギ「そんな、こ!! 子供じゃないのだから!! ただちょっと寝つきが悪くなるというか…」
 ナギ「停電とかになったら真っ暗になるから危ないっていうか その——」
 ハヤテ「……………」
 ナギ「だからその!!」
 ハヤテ「はは… まあいいじゃないですか…」
 ハヤテ「そういうのがあった方が、」
 ハヤテ「可愛いですよ。」
 ナギ「……………」
 (『ハヤテのごとく!』③：31～32)
- (21) ハヤテ「でも今、授業中みたいですけど…いいんですか？ 桂さんは出なくて。」
 ヒナギク「……」
 ハヤテ「桂さん？」
 ヒナギク「あーもぉ うるさいうるさい だまれ——!!」
 ヒナギク「仕方ないじゃない。チャー坊助けているうちに授業始まっちゃったんだから」
 ヒナギク「途中からなんて恥ずかしくて入れないでしょ？」
 ハヤテ「まあそうかもしれませんが……………」
 ハヤテ「ところでチャー坊って？」
 ヒナギク「さっき助けたヒナ鳥」

ヒナギク「茶色のスズメだからチャー坊。」
 ハヤテ「…… 単純…」(うわぁ…)
 ヒナギク「な!! 何よ!!」
 ヒナギク「まんがと名前はわかりやすさが大事なんだから!!」
 (『ハヤテのごとく!』④:74)

(20) では、ハヤテとナギが、地下鉄工場の現場にまよいこみ、道にまよったとき、ハヤテがナギのくらいところが苦手であることをいうと、ナギがこまってしまっている。ツンデレ表現としては、発話頭のつかえが多用されて、ナギのあせりと心の動揺していることがあらわされる。また、副詞「別に」を使用することで、自分はそれほど苦手ではないのだと主張しようとする。ナギは、当然のことながら、ほほをあらかじめ、ハヤテと目をあわすこともできない。

(21) は、ハヤテとヒナギクが、カラスにおそわれたスズメの雛をたすけた直後、学校の時計塔の最上階にある生徒会室で、会話しているところである。ツンデレ表現の典型である接続助詞カラの「言いさし」が2回も使用され、発話頭のつかえもある。

ハヤテに授業開始を指摘されて、あせったヒナギクは、ほほをあらかじめながら、「うるさいうるさい、だまれ」とハヤテに八つあたりをする。つづけて、「助けているうちに授業始まっちゃったんだから」といっても、実際には授業のことなど、それまでまったく意識しておらず、「名前はわかりやすさが大事なんだから」というが、これもその場しのぎのおもいつきをいっているにすぎない。ハヤテに生徒会長が授業に出席していないという弱点を指摘されて、あせりのあまりに、心にもないことを口にしてしまっている。しかし、本心では、わたしがうっかりしていた、ちょっと単純すぎたかな、のような反省の気持ちがあり、それがすなおにいえずに、このような表現になってしまっている。

両者を比較すると、ナギとヒナギクのツンデレ表現があきらかにことなる部分のあることがわかる。それは、ナギのばあい、発話頭のつかえ等で心が動揺していることがしめされるのみであるのに対して、ヒナギクでは、それにあわせて、その場しのぎで心にもないことをいってしまう「～から」の「言いさし」が使用されている。これは、2章と3章で比較した、清少納言と翠星石にもみられた傾向である。

つづいて、デレデレに該当する表現をあげる。

(22) ナギ「で…私もあれから考えたのだが…」

ナギ「お前、住み込みの仕事を探していただくろう？」
 ハヤテ「え?」「うん…」
 ナギ「だったらこの家で…」
 「私の執事をやらないか?!」
 (『ハヤテのごとく!』①:76~77)

(23) ヒナギク「そのうち…ママにここへ出入りするようになるかもよ？」
 ハヤテ「そんなまたまた…」
 「桂さんったら…」
 ヒナギク「ヒナギクと呼びなさい」
 ハヤテ「へ？」
 ヒナギク「桂っていうと同じ名前で私より目立つ人がいるからみんな下の名前で呼ぶの。」
 ヒナギク「だから私の事はヒナギクって呼びなさい。」
 ヒナギク「いいわね?」「綾崎…ハヤテ君。」
 (『ハヤテのごとく!』④:77)

(22) (23) とともに、この作品内での有名なセリフのである場面である。(22) では、ナギがハヤテを自分の家の執事としてやとうことをきめて、ここからお嬢様と執事の物語がはじまる。(23) では、さきの(21)の直後、生徒会室をあとにするハヤテに、ヒナギクが自分を姓ではなく名前ではよぶようにいう。ここでは、ナギもヒナギクも普段の強気な表情をしておらず、やさしそうなおだやかな表情をしている。ともに、ハヤテを、友人以上の心をゆるした存在とみとめたゆえと、かんがえられる。

以上、4章では、『ハヤテのごとく!』でのツンデレキャラクター、三千院ナギと桂ヒナギクのツンデレにかかわる表現をみてきた。2人は、性格的には通じるところのあるキャラクターという記述があるにもかかわらず、ことツンデレの表現という面では、あきらかにことなるところがある。次章では、この点について、さらに検討をすすめる。

5 上位者から下位者へのツンデレ表現

2章から4章までみてきたように、典型的なツンデレ表現をかんがえるうえで、もっとも重要なのは、接続助詞カラによる「言いさし」を使用するか、使用しないか、という点である。そして、それは、その使用者と被使用者の関係が対等の関係なのか、上下の関

係なのかという対偶面のちがいが、要因となっている可能性があることを、現象面から確認した。

つづいて、この章では、なぜ、上下の関係であると接続助詞カラによる「言いさし」の表現を使用しないのか、という点を検討する。

(20) でのナギのセリフを出発点にして、かんがえてみたい。引用部分の8行目である。

(24) べ!! 別に一人で眠れない事もないのだぞ!!

このセリフからは、自分が夜一人で眠れないようなことはなく、こわがりでもないことを、ハヤテに説明しようとしているのがわかる。しかし、(24)を接続助詞カラの「言いさし」の表現に変換してみるとどうなるだろうか。

(25) べ!! 別に一人で眠れないこともないんだから!!

(25)のようにすると、(24)とはあきらかにことになった印象をあたえる。発話頭のつかえや副詞「別に」で、心の動揺していることことをしめしているところはおなじなのであるが、カラの「言いさし」を使用することで、「一人で眠れないこともない」ということが、事実の説明ではなく、本当はそうでないことをいってしまった、という印象をあたえるのである¹³⁾。

さらに、(24)のように終助詞ネを付加すると、またちがった表現となる。

(26) べ!! 別に一人で眠れないないこともないんだからね!!

(26)は、本当はそうでないことをいってしまっただけでなく、終助詞ネを使用することで、それをさらに相手に同意をもとめるかのように表現していることになる¹⁴⁾。そして、これは、最初にツンデレ表現の典型例としてあげた(3)の例と、非常ににたものとなっている。

(3-再掲) し、心配なんて、してないんだからね!

(3)では、発話頭のつかえで、心の動揺をあらわし、カラの「言いさし」の部分で本当は心配しているのに、すなおにそうとは表現できないで、本心とは逆の内容を口にしてしている。ツンデレ表現においては、相

手に好意をもつあまりに、すなおに自分の気持ちを表現できない、でも、それを察してほしいかも、という複雑な気持ちがあらわされていることになる。

しかし、三千院ナギのばあい、執事の主人であるお嬢様という立場上、そのような表現をするわけにはいかない。主人として目下の者を指導する立場にあるわけで、あくまでも凛としてふるまうのが建前である。それゆえ、お嬢様のような立場のものが、使用するツンデレ表現は、制約をうけると想定される。たとえば、(3)の例文をお嬢様が発言するなら(27)や(28)のような例文が想定される。

(27) し、心配などしておらんぞ!

(28) し、心配などしておりませんわ!

ナギの用語の使用傾向からすると、(27)の可能性がたかく、典型的なお嬢さまキャラクターなら、(28)のようにもいう可能性がある。

発話頭のつかえによって、心の動揺をしめしつつも、自分は心配していないと終助詞ゾやワでいいきること、かりにそれが本心からでなく、相手にそれを見ぬかれたとしても、お嬢様の立場を保持することができる。これは、相手に本心の推測を要請するような終助詞カラの「言いさし」とは、あきらかにことになった表現であり、お嬢様にとっては、目下が相手のばあい、たとえそれが恋心をいだく者であっても、このようにしか表現できないとおもわれるのである。

6 上位者から下位者への典型的なツンデレ表現

しかし、お嬢様であっても、典型的なツンデレ表現に通じる使用例がまったくないわけではない。その一例として、『ゼロの使い魔』¹⁵⁾の主人公、ルイズ・フランソワーズ・ルブラン・ド・ラ・ヴェリエール(以下ルイズ)の例をあげる。彼女は、年齢は16歳、小柄で、桃色がかったブロンドの長髪、つり目できびしい表情をみせるツンデレキャラクターである。

『ゼロの使い魔』は、普通の日本人の高校生(17歳)平賀才人(さいと)が魔力の日常的に使用される異世界に召還されて、ルイズのしもべの使い魔になってしまい、その世界でおおくの仲間とともに活躍するファンタジー作品である。才人の主人であるルイズは、名門貴族ヴェリエール家の3女であるものの、魔法はまったくだめであったが、どういう理由か才人を使い魔と

して召還してしまう。

ルイズは名門貴族の子女だけにまじめでプライドがたかく、しかも魔法がつかえないという劣等感もあって、強気ですなおになれない性格である。才人に対しても、自分をたすけてくれるところに感謝の念はあり、あわい恋心もいだいているが、才人が他の女性と親密にしていると、嫉妬心にかられて、彼にきびしい暴力の罰をあたえてしまう¹⁶⁾。

- (29) 才人「俺ってば、こっちの世界ではモテ男みたいでさ 召還されてよかった〜♡
なんつって」
ルイズ (ギュ)「わたし……間違ってたわ
あんたを人間扱いしてたみたいね」
ルイズ (バッ)「這いつくばれ——!!」
ルイズ「エロ犬〜ッ」(ドコーン)
『ゼロの使い魔』①:139~140)

(29) は他の女性たちからチャホヤされている才人が、あろうことか、自分ももてているとにやけているのを見て、ルイズは爆発してしまう。いかりのあまりに、「エロ犬」とさげびながら、電撃のムチをふるう。

このように、ルイズは日常的に才人を自分の下僕である使い魔として、対等の関係はおろか、人間あつかいもしない。それが、才人の力をかりて、ルイズが最初の手柄をたてて爵位をえたときだけは、ほかにはないツンデレ表現をしている。

- (30) ルイズ「踊ってあげてもよくってよ…？」
才人「へ…？へ…？」
才人「おっ」「『踊ってください』——じゃねえのか？」
ルイズ「ふう〜 仕方ないわね」
ルイズ「今夜だけだからね」¹⁷⁾
才人 (!)
ルイズ「わたくしと」「一曲踊って下さいませんこと…？ ジェントルマン」
『ゼロの使い魔』②:126~127)

(30) では、ルイズの爵位を祝しての舞踏会において、才人はルイズから踊りにさそわれる。その際、ルイズは普段あまり使用しない、いかにもなお嬢様ことば、「よくってよ」「わたくし」「下さいませんこと」などを使用する。さらに、「ジェントルマン」のよびかけとともに、「今夜だけだからね」という、接続助詞カ

ラの「言いさし」と終助詞ネのあるツンデレ表現を使用する。

この「今夜だけ」というのは、この「今夜だけ」は一人前の紳士として相手することを宣言しているとすただけでは十分な理解をしたとはいえない。彼女の才人へのひめたおもいもふくめた、本当は「今夜だけ」でなく恋人でいたい気持ちがあるものの、2人の立場のちがいはそれをゆるさない、それでも「今夜だけ」であってほしくない、という裏の気持ちがあり、「今夜だけだから」というのは、けっして、ルイズの本心ではないのである。

そのようにみていくと、かなり屈折した表現ではあるものの、この(30)の「今夜だけだからね」は、本稿でみてきた、他の典型的なツンデレ表現、(3)(4)(7)(8)(12)(21)などの例と同様のものとみることができる。また、典型的なツンデレ表現が、本心でないことを口にするすることで、逆に相手に自分の本心を察してほしいということを、相手に気づかれない可能性がありつつも、内にひめた表現であるということが、あらためて、確認されたということにもなる。

そして、ルイズがこのような表現ができたのは、あくまでも、舞踏会という一夜かぎりの非日常的な場において、踊りのパートナーという、才人を特別あつかいすることが可能な待遇方法があったことにつきる。上位者から下位者への、接続助詞カラの「言いさし」による、典型的なツンデレ表現は、やはり、原則として、使用不可とならざるをえないのである¹⁸⁾。

7 ツンデレ表現の待遇性

本稿の検討の結果、以下の2点があきらかになった。

- (31) ツンデレ表現には、発話頭のつかえなど、心の動揺をしめすものと、接続助詞カラの「言いさし」による、自分の本心と逆のことをいうことで、自分の本心をかくしつつも暗にそれを察することを要請するものとの、2つのタイプがある。

- (32) 前者が対偶面を考慮することなく使用されるのに対して、後者は対偶面で対等の関係でのみ使用することが可能となる。

本稿では、とくに後者を典型的なツンデレ表現としたが、これは、西田(2008)で例をあげたように、この接続助詞カラによる「言いさし」を使用することで、

そのキャラクターがツンデレと認識される事例がおおいことによる。ただし、この表現は、その使用においては、つよい対偶面での制約が存在するのである。

ツンデレ表現には、さまざまな言語的な要素があり、個々についての分析は、今後さらにすすめる必要がある。今回は、マンガ作品を主要な検討対象としたが、アニメ作品においては、今回とりあげた釘宮理恵¹⁹⁾のような特定の声優がツンデレと意識されることもおおい。マンガ以外の分野でのツンデレ表現の検討も今後の課題としたい。

注

- 1) 以下、用例の下線は、稿者が付した。
- 2) ネ言 (2006a・2006b・2006c・2006d・2006e・2008a) による。
- 3) 西田 (2008) を参照のこと。
- 4) 谷川流作のライトノベル。角川スニーカー文庫①～⑨角川書店2003年6月～2007年4月。
- 5) ピーチピット作のマンガ。①～⑧幻灯社2003年3月～2007年6月。
- 6) 高橋弥七郎作のライトノベル。電撃文庫本編①～⑩・短編集4冊株式会社メディアワークス2002年11月～2008年6月。
- 7) 加藤和郎作のマンガ。①～⑧小学館2003年2月～2004年11月。
- 8) 美水かがみ作のマンガ。①～⑥角川書店2005年1月～2008年9月。
- 9) かかし朝浩作のマンガ。①～③株式会社ワニブックス2007年8月～2008年9月。
- 10) 翠星石は丁寧語のデスを、定延 (2007) の提起する「キャラ助詞」として使用するキャラクターでもある。本稿では、「キャラ助詞」についての検討は保留する。
- 11) 声優。アイムエンタープライズ所属。詳細は所属事務所のタレントプロフィールを参照のこと。
- 12) 『ハヤテのごとく!』のキャラクター解説については、畑 (2007) を参照のこと。
- 13) ツンデレ表現での接続助詞カラの「言いさし」の機能については、ネ言 (2006d・2006e) に詳細な分析がある。「ツンデレキャラの本心は言語行動に投影されない」(ネ言2006e) との指摘がある。
- 14) ツンデレ表現での終助詞ネの機能については、ネ言 (2008a) に詳細な分析がある。「終助詞ネの働き：話し相手との“つながり”を形作る」(ネ言2008a) との指摘がある。
- 15) ヤマグチノボル作のライトノベル。①～⑬外伝2冊宝島社2004年6月～2007年12月。ただし、引用は分量の都合上によりマンガ版を使用する。ヤマグチノボル原作・望月奈々作画①～④株式会社メディアファクトリー2006年12月～2008年3月。
- 16) 『ゼロの使い魔』のキャラクター紹介についてはヤマグチノボル (2008) を参照のこと。

- 17) ライトノベル版 (①:258) では「今日だけだからね」とある。「今夜」と「今日」とでことなるが、論旨には影響しない。
- 18) ネ言 (2008b) には、お嬢様ことばとツンデレ表現とは共起するという立場での記述がある。ただし、そこにあげられた例は「わ、わたくしは心配なんてしていませんことよッ!」と、心の動揺をしめしながらも、自分の立場の説明を終助詞ヨでいきるように表現するものである。本稿の分析結果とは矛盾しないものとかんがえている。
- 19) 釘宮理恵は、『ハヤテのごとく!』の三千院ナギ役と『ゼロの使い魔』のルイズ役と『灼眼のシャナ』のシャナ役の声優でもある。

参考文献

- 可愛零編 (2005) 『「ツンデレ」大全』株式会社インフォレスト
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 金水敏編 (2007) 『役割語研究の地平』くろしお出版
- 釘宮理恵 (2007) 『ツンデレカルタ』株式会社 DEARS
- 釘宮理恵 (2008) 『ツンデレ百人一首』株式会社 DEARS
- 定延利之 (2005) 『ささやく恋人, りきむレポーター』岩波書店
- 定延利之 (2007) 「キャラ助詞が現れる環境」金水敏編『役割語研究の地平』くろしお出版
- 畑健次郎 (2007) 『少年サンデー公式ガイド ハヤテのごとく!』(小学館)
- 萌え用語選定委員会 (2005) 『萌え萌え用語の萌え知識』株式会社イーグルパブリッシング
- ヤマグチノボル (2008) 『ゼロの使い魔 Perfect Book』宝島社
- 西田隆政 (2008) 「役割語としてのツンデレ表現—「役割表現」研究の可能性—」土曜ことばの会2008年10月11日発表資料

参考サイト

- アイムエンタープライズ タレントプロフィール
釘宮理恵 <http://www.imenterprise.jp/data.php?id=12>
- ネ言 (2006a) ツンデレ言語論 (1)
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20060607/1149675022>
- ネ言 (2006b) ツンデレ言語論 (2)
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20060612/1150081951>
- ネ言 (2006c) ツンデレ言語論 (3)
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20060627/1151385886>
- ネ言 (2006d) ツンデレ言語論 (4)
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20061121/1164097139>
- ネ言 (2006e) ツンデレ言語論 (5)
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20061122/1164182910>
- ネ言 (2008a) ツンデレ言語論 (6)
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20080723/1216746778>
- ネ言 (2008b) 多重役割制約
<http://d.hatena.ne.jp/negen/20080916>